

松屋筆記

卷世四

45
1397
18

69



門 15
院 1397
卷 18

高田早苗
三田三首
高田早苗

松屋筆記
廿四



12 H15

20. 22. 23.

乃
八
十
三
日

杉屋筆記巻廿九目録

一 土杉録信のた刀

二 歌舞妓お目

三 所評

四 かのむ

五 白指

六 白も

七 かりと子

八 禪

九 千りまら子

杉屋筆記

十 三ノグ
 十一 油あり
 十二 武の字
 十三 寺の舟
 十四 おみ人
 十五 法華巻
 十六 戴録
 十七 泣男
 十八 杉平物後
 十九 廣松城

廿 能取紙
 廿一 おぢやうあみ紙
 廿二 三ノグ
 廿三 金の批打のさし物
 廿四 ちか紙
 廿五 監取
 廿六 漆扇をたしこみ
 廿七 鎌鏡
 廿八 ちか紙
 廿九 大河善一印鉄鏡おみ紙

一 糸目人の物産

④ 輝

⑤ 毛糸

⑥ 年貢

⑦ 繁戸

⑧ 柿の了

⑨ 箱根石也山小田原

⑩ 摺字子のツギ

松屋事記卷廿四

東都 高田此房文信持

① 上杉謙信の太刀

武辺吐聞書曰の巻二上杉謙信の大

刀森重孫鎌倉光行三丁子川中嶋竹腰

兼光谷切兼光と大刀打ののり太刀弁候

並光いえず神後老津の百姓是也

即事お少中も多うけるよ雷打よ時

知りしる百姓刀地抜切先を以てり

指と目とや多き者より特しく天候

久徳もつらき切先より一戸計兵
半而好の郎も初に無ううて雷居り
け丹もあつて天つぐりしは数日
豆もはるまの希より海りしは袋の破
りより大粒一粒つてるもやまふこ
つら切りしそをもつらまやまふこ
丹かしそより不思議なる買取つて
竹俣へのさるそをとおし後より輝虎
身上入る謙信の指針よりぬりし
三月廿七夜二夜日の川中より
合戦の時

信玄内の形取月ま左又よりの者一
の浪泡を打ちまく所より謙信乗
徳竹俣を走らし切らるる
河守定頼より命を傳田内
明へ河州流形取月
二下河守を世澄う先切先
切らるる浪に打ちこ
魁のふとをいよ切らるる
み年よりある者不審しん
きと怪けり字に謙信竹俣を走らし

切なるん事申されし事よあはれ
刀を勝代より奪ひて持ちし事よ
えし其刀指す事城守の事よ
先直に山崎の事城守の事よ
若老も手書紙刀城守の事よ
の水を石部
かた形ありし事よ
に河守の事よ
取替の事よ
高き事よ

二馬の尻一節を移りて
真く奪ひし事よ
申し多勝合点し
火も何れも地守の事よ
先の二馬の事よ
しん清水の事よ
候も先の事よ
一紙にれい紙の事よ
悉く奪ひし事よ
竹段も先の事よ

欲殺火六年 遲神其識 伯伎
國之手向山 亦云 亦指在此山故和
禮共后下者 汝待取者 不得取者
必於殺汝云 而以火燒似猪大石 而
轉落南道下 取時 即於其石所
燒者 而取 南其所 祀命 哭其心而
考正于天 請神 產集日之命一時
乃遣 討其 貝比 貴之 與 蝦 貝比 貴之
作活 爾討 汝貝 比貴 以 貴之 貴之
始 貝比 貴之 持水 而潔 其 母 記 計 者

成 震 壯 夫 而 出 遊 行 云 一 日 本 紀 景 行
紀 廿 三 年 子 乘 輿 幸 何 轉 入 東
海 冬 十 月 至 上 德 國 從 海 路 渡 淡
水 門 是 所 聞 道 賀 鳥 之 聲 欲 見
日 之 鳥 欲 擊 而 出 海 中 仍 得 白 物
於是 瞻 臣 遠 祖 名 聖 之 鹿 六 雁 以
浦 為 手 纒 為 膽 而 進 之 年
中 行 幸 和 州 六 月 日 行 幸 命 世 轉 入
天皇 廿 三 年 八 月 行 幸 命 世 轉 入
東 國 冬 十 月 到 上 德 國 安 房 房 津 津 島

⑨ チリセキ

ツボ人の流よりなり此れあはたし
ライフとそりあはたしはツクの色
音こはん人ごうツクツクとあまは
トウツクツクツクとあまは
をツクとそりあはたしはツクとあまは
のツクとそりあはたしはツクとあまは
リ言はれよともあはたしはツクとあまは
とそりあはたしはツクとあまは

⑩ ソグ

ツボ人の流よりなり此れあはたし
ライフとそりあはたしはツクの色
音こはん人ごうツクツクとあまは
トウツクツクツクとあまは
をツクとそりあはたしはツクとあまは
のツクとそりあはたしはツクとあまは
リ言はれよともあはたしはツクとあまは
とそりあはたしはツクとあまは

ツボ人の流よりなり此れあはたし
ライフとそりあはたしはツクの色
音こはん人ごうツクツクとあまは
トウツクツクツクとあまは
をツクとそりあはたしはツクとあまは
のツクとそりあはたしはツクとあまは
リ言はれよともあはたしはツクとあまは
とそりあはたしはツクとあまは

⑪ 神あり

ツボ人の流よりなり此れあはたし
ライフとそりあはたしはツクの色
音こはん人ごうツクツクとあまは
トウツクツクツクとあまは
をツクとそりあはたしはツクとあまは
のツクとそりあはたしはツクとあまは
リ言はれよともあはたしはツクとあまは
とそりあはたしはツクとあまは

骨の巫女李女須使下建祝記女須
泣回孝武帝下我左右皆伏言昔
如左骨為天子泣子師在回見女須
云武帝非下故伏而聽之可也
之

② 武の字

同書同卷六武女子何疑貝子倉
顔作書止戈為武雙子師古曰武
字從止從戈所謂會意也
續日本紀引注い可、讀こ

③ 夫木抄 雜古河部 連也 八年百
百 氣 何 姑 九 條 内 五

やまがり 骨のおのづかき 左注
云い骨判者走倭朝五云 骨
の骨より骨 骨より骨
くまやまの骨 骨
子 新 唱 骨 骨 骨 骨 骨
相似とりのり 骨の骨の骨

の比喩する程をなす。金提旨より。
何れかのちのさ木の母木のさの
かぐよぐらるるさう。わ
其本所、辯六言結部。
さうとの月、伊をよなす。の
たさうありさういふ。たさ
よまさう。又指さ。たさう。石に別
壽命。緩さ。たさう。いん。ゆる
つ。さう。たさう。たさう。たさう。

緩さ。の。糸。の。た。お。か。ん。
命。さ。い。く。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。
若。の。緩。さ。の。た。さ。う。た。さ。う。
ら。ん。た。お。と。冠。辞。考。七。の。ち。た。さ。う。
い。け。の。お。ま。え。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。
た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。
た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。
た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。
た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。
た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。た。さ。う。

あふふん

⑤ 法華を

鎌倉に於て御の法華を此一書の
ある所の...
追福のたぐ...
後白河院に法華を...
門考の法華を...
あふふん 法華を

正徳文徳四年
正月四日の事
と定此法華院依
りて此法華を
戴飾又云
前此係す

⑥ 戴飾

戴飾の...
諸葛ゆ拔萃...
小定戴飾の...
台記

⑦ 泣男

太平記...
佐兵衛...
廣の修験山伏...
梶本院と云ふ

△志貴右衛門
の松平信房
之の弱水

その家。貞宗の太刀。和田賢秀の
感状。桐子志貴右衛門向答。覚也。
控書。起請文。桐公天地祥瑞志貴
公之記。桐公志貴右衛門。正成
桐庄五郎。送物の状。同正行。遠
言の書。自人位の状。桐系通。其
可蔵。一。和田賢秀。感状。其

今度、我傷減一。所懸命。之。場
供。其。心。存。右。顯。我。功。高。家。施。局

目。の。事。一。偏。貴。所。依。身。志。誠。以
改。其。心。信。之。為。是。為。恩。謝。其
所。守。社。作。之。貞。宗。為。鍛。磨
利。支。又。一。柄。道。上。之。後
刻。於。其。帝。恩。考。之。以。所。成。之。是
不。具。謹。之。於。其。面。湯。之。時。可。中。謝。也

二月廿一日
留賢秀
信本佐兵衛尉殿

一 延

遊可成ききりぬれいふことなきを

考つし

防脱し毎日向いしもまかす候

ききりし

一 甲冑いとおのむききりし

好むつらん

一 七せいのる何れせんせきす

を遠かりしつらんは足のこと

ききりし

一 白刀の号のたききりし

ぬつらん

一 言まのる物をももかん

一 人の思地しきりきりし便

ぬつらん

一 世のる思もあかきりし

一 ありあきあるもほりかん

一 ころりんぬぬ報人の思

一 常人の可禁

一 只今日の世のりぬらん

こと

⑥ 松平物誌

大河内氏がまつ秀元は松平物誌に記し
ありの心も朝鮮に征伐する大河内氏
驛守するに属して功をとりし
その事一記朝鮮物誌とて一とあり
大河内氏物誌
江戸幕府より之を祀興業の事なり
まつ一 大河内氏盛衰の事あり
まつ一 大河内氏盛衰の事あり
まつ一 大河内氏盛衰の事あり

の系嫡如品 大河内氏 徳川氏 下代 徳川氏
然らざるに 仍て 重授けしもの 徳川氏
頼政十九代 之末孫 大河内氏 大膳 大
丈入 是成也 源 秀元 寛文 四年 甲
辰 洞 早苗 月吉日 大 名 澤 加 賀 守 長
也 あり

⑦ 濱松城

同 一 子 永 祚 十 年 一 赤 田 大 膳 大 丈 晴
信 騷 弱 子 乱 一 氏 貞 守 中 の
城 を 敗 北 一 所 あり あり あり あり

⑤ 濠取

みよの栗忠を敵の首地捉其鳥地
濠より其首七馬を以て其首を以て又云小
栗栗の濠より其鳥ありと云く其首を以て
と語は其首を以て

⑥ 濠取

みよ大久保其首を以て其首を以て
り其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て

石以のあり其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て

⑦ 鑄鏡

みよ大河のあり其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て
其首を以て其首を以て其首を以て

⑧ 其首を以て

なごころのわ

廿三 串のつと

同一の巻の陰符の地月の子ある程の
安子成の物より串のつとをいふ
清安の子申す刺しと刑の事と声名記
をいふとつとをいふ物なるは
かみよりつとをいふ物なるは可進記

廿三 策人の戸

同一の巻の七の巻の厨急き、向をよむは
地柱のまの厨急き、厨急き、考の年

杯園をいふ軍兵地を知りし一のすとも
切破り、流地地以て防つる敵とあまを
追散し、関の声を及つる二のいとも
とあまのまの田のあまを依田肥家とつと
とやあまのつと

廿四 柿のつと

同一の巻の七の巻のつとをいふ物なるは
さあつと、七の巻のつとをいふ物なるは
つとをいふ物なるは、つとをいふ物なるは
つとをいふ物なるは、つとをいふ物なるは
つとをいふ物なるは、つとをいふ物なるは
つとをいふ物なるは、つとをいふ物なるは

廿五 箱根石垣山小田原

同二の書より天正十六年庚子三月一日
上馬お卯の苗原より動座越つて
康の一よりものりてのりて
とらるるおせがやの相印の
日物牛一の切あわの岩の境
一面よりあ原のちをぬれ
一よりおせがやの公の
等々小田原の海山のと
日物に絶れおけるの
は急ぐ之止て

海上より海をぬれ
城柳地持つたれ
の所おせがやの
法ある大なる
おの城を
廿六 振新子のつ才

同書の二の書より
さをもおせがやの
一とよきもの
せよと

松屋筆記卷廿六

東都

~~厚熙清文傷稿~~

①均輸法

後漢書朱暉傳子尚書張林上言
穀所以貴由錢賤故也可盡全





